

I-21

アレハンドロ・アラヴェナの最初期から近年における作品分析の研究

—incremental-design を中心とした建築思想の分析—

A study on the analysis of works of Alejandro Aravena from the earliest works to recent one

—The analysis of the architectural thoughts with a focus on “incremental design”—

○櫻井翔太¹, 山中新太郎²*Syota Sakurai¹, Shintaro Yamanaka²**1-1 背景と研究目的**

近年の日本では、土地の有効利用や都市機能の更新を目的に大規模再開発が行われ、街並みの景観の悪化などが起こっている。また、都市部への人口集中による住宅環境の悪化や資産格差の悪化なども生じている。これらは、先進国においても発展途上国においても共通の課題になっている。アレハンドロ・アラヴェナはチリにおける都市化などの社会問題に目を向け、場所性を重んじている建築家である。

本研究では、アラヴェナの incremental design という建築概念に着目し、空間構成の概念や操作の思考を解明していくことを目的とする。

1-2 研究対象と研究方法

研究対象は、アラヴェナの主要作品を掲載している「a+u」、「GA DOCUMENT」、「アレハンドロ・アラヴェナ フォース・イン・アーキテクチャー」、「AV monographs」などの作品集におけるアラヴェナの 1997 年から 2015 年までの 21 作品とする。

研究方法は、前述した作品における図面・写真・テキストから、incremental design について概念を分析する。

1-3 既往研究と本研究の位置づけ

市毛^[1]らは「アレハンドロ・アラヴェナ—南米の文脈からエレメンタルの活動を通して—」において、アラヴェナが生まれた南米の歴史的背景やアラヴェナとエレメンタル*の問題へのアプローチ方法を明らかにしている。しかし、この研究では、incremental design についての言及はない。本研究は incremental design が全ての作品に通底するという仮定で、アラヴェナとエレメンタルの 21 作品を分析し、各作品にどのような形でその概念が投影されているかを平面分析などをして、考察する。

2-1 incremental design について

Incremental design について、WIRED では次のように記されている。『自らの設計アプローチを incremental design と呼ぶアラヴェナにぴったりのプレゼンテーション方法だったといえるだろう。このアプローチを使って、アラヴェナと彼のスタジオ・ELEMENTAL のデザイナーは「意図的に」「未完成の」構造設計を行っている。』^[2] また、第 15 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「REPORTING FROM THE FRONT」レポートでは次のように記されている。『常に変化し、状況に適合していくもの、その不完全なプロセスにこそ建築の価値があるというコンセプト「UNFINISHED」自体は、アラヴェナが提唱している「Incremental Design」という考えとも極めて近い。』^[3] これらのことから、incremental design は機能が決まった空間ではなく、隙間や余白など、住む人や使う人が自由にその場所を拡張していける空間のことであると考えられる。

3-1 配置分類

平面図上で incremental design が反映される空間の配置についての類型と事例を以下に示す。



Fig. 1 配置類型

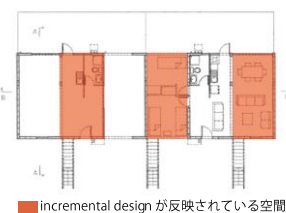


Fig. 2 キンタモンロイの集合住宅 著者一部赤色に着色

3-2 incremental design が反映されている空間の類型と傾向

全 35 作品のうち、配置における類型によって本研究での分析対象である 21 作品は以下に分類され、地域、工期、建築面積、用途などの項目によって類型の分析を行う。分析対象の 21 作品による類型は以下に分けられる。

Tab. 1 作品年表と 21 作品の類型

分析対象	年代	アラヴェナ作品群系列	場所	工期	建築面積	用途	配置類型
○	1993	彫刻家の家	チリ	1年以内	120㎡	住宅	分散型
○	1988~1999	数学部研究棟	チリ	1年	2000㎡	教育施設	中央型
○	1999	イースター島の高校	チリ	1年以内	2000㎡	教育施設	分散型
○	2001	モンテパルリス・スクール	チリ	1年以内	1000㎡	教育施設	—
○	2001~2002	工学部棟	チリ	1年	9000㎡	教育施設	中央型
○	2001~2004	医学部棟	チリ	1年	9000㎡	教育施設	偏向型
○	2002	建屋200年電波塔	チリ	1年以内	10000㎡	電波塔	—
○	2003~2005	パルチの住宅	チリ	1年	5000㎡	オフィス	囲い込み型
○	2003~2004	ピリウエイコの住宅	チリ	1年	350㎡	住宅	分散型
○	2004	建築学部棟	チリ	1年以内	1500㎡	教育施設	偏向型
○	2008	ヴェルボ・ハイパー大学	チリ	1年以内	1000㎡	教育施設	—
○	2006~2008	セント・エドワード大学学生寮	アメリカ	2年	30000㎡	住宅	中央型
○	2007~2008	サンパブロの住宅	ブラジル	1年	370㎡	住宅	分散型
○	2008	ワイトラ・チルドレン・ワークショップ	ドイツ	1年以内	800㎡	美術館	—
○	2008	パルチの100	中国	1年以内	900㎡	住宅	分散型
○	2008~2010	巫札橋の展望台	メキシコ	2年	148㎡	展望台	—
○	2009	ペン銀行	メキシコ	1年以内	16000㎡	金融施設	—
○	2009	プラヤ・オサ・リゾート	ハワイ	1年以内	20000㎡	宿泊施設	偏向型
○	2009	バー・ビル・美術館増築	スイス	1年以内	800㎡	美術館	分散型
○	2009	オーシャン・ワイナリー	ドイツ	1年以内	4200㎡	ワイナリー	偏向型
○	2009~2010	メキシコ現代美術館	コロンビア	1年	4300㎡	美術館	—
○	2009~2010	ケリー邸	ブラジル	1年	700㎡	住宅	分散型
○	2011	ケリー邸	チリ	1年以内	450㎡	住宅	—
○	2011~2013	アナレト・アンジェリニ・コグアーション・センター	チリ	2年	8000㎡	オフィス	分散型
分析対象	年代	キントモンロイの集合住宅	チリ	5年	建築面積	用途	配置類型
○	2003~2004	モンテパルリスの集合住宅	チリ	1年	3600㎡	住宅	分散型
○	2004~2007	レンガの集合住宅	チリ	3年	5100㎡	住宅	偏向型
○	2005~2010	集合住宅の集積所	チリ	5年	120~300㎡	宿泊施設	—
○	2008~2010	パルチの集合住宅	チリ	4年	4600㎡	住宅	—
○	2008~2010	モンレイの集合住宅 ラス・アナカス	メキシコ	2年	2800㎡	住宅	分散型
○	2009	マイク・イスト・ライオン	アメリカ	4年	405㎡	住宅	偏向型
○	2009~2013	ワシントン・大学の集合住宅	チリ	1年以内	6600㎡	住宅	偏向型
○	2010	エレメンタル・エドワード	チリ	1年以内	30㎡	高級住宅	—
○	2013	サンティアゴ文学センター	チリ	1年以内	2500㎡	文化施設	—
○	2013	現代美術館国立センター	ロシア	1年以内	830㎡	美術館	—
○	2015	モンロ・コルチュアル	チリ	5年	830㎡	文化センター	偏向型

類型として、地域ではチリが多く見られ、工期では1年以内、1年が多く見られた。さらに、建築面積では0~1000㎡が多く見られ、用途では住宅が多く見られた。また、分散型、偏向型には住宅が多く見られた。これらは、アラヴェナの出身地や家の半分しかつからないという設計手法や思想などが関係していると考えられる。

4-1 図面以外から見る incremental design



Fig 3 増築前



Fig 4 増築後

「キントモンロイの集合住宅」(Fig3.4)では、家の一部分を「意図的」に「未完成」のまま残すという設計手法を用いて設計されている。また、建設された場所は、スラムの中であり、この計画は低予算で集合住宅をつくるという行政事業であった。そして、スラムで暮らしている人たちはセルフ・ビルドの能力に長けていた。これらのことを踏まえアラヴェナは、スラムという住環境の悪化という社会問題を解決しつつ、予算もかけず、その地域の特徴もつづさない建築をつくりあげた。このように、incremental design は外部要素と予算と密接に関係していると考えられる。



Fig 5 外観 1



Fig 6 外観 2

「ピリウエイコの住宅」(Fig5.6)では、2階に多くの余白空間が存在している。この余白空間は、様々な形態で設けられている。このことで、室内空間の形態が不規則になり、シークエンスを生み出す装置になっている。また、建設された場所の周辺には、湖、森、火山などがある。そのため、余白空間を分散させることで、シークエンスを生み出させているのではないかと考えられる。このように、incremental design は外部要素と密接に関係していると考えられる。

また、他の作品にも「意図的」に余白空間をつくり、環境に配慮した操作や1つの機能にいくつかの機能を付加する操作が行われていた。これらにも外部要素と予算が密接に関係していた。

5-1 結論及び今後の展望

これらの分析から3つのことがわかった。1つ目は、配置タイプの分散型と偏向型にはアラヴェナの設計手法や思想が密接に関係していた。2つ目は、incremental design という概念は、セルフ・ビルド以外にも様々な操作が関係していた。3つ目は、incremental design という概念が反映されている空間には、外部要素と予算が非常に密接に関係していることがわかった。

今後の展望としては、新たな要素を照らし合わせることで、incremental designの本質をより明確にしていけるだろう。

参考文献

[1]市毛毅 「アレハンドロ・アラヴェナ南米の文脈からエレメンタルの活動を通して」2012年3月

[2]WIRED <http://wired.jp/2016/02/07/alejandro-aravena/>

[3]第15回 ヴェネチア・ビエンナーレ 国際建築展「REPORTING FROM THE FRONT」レポート <https://medium.com>

[4]アレハンドロ・アラヴェナ「アレハンドロ・アラヴェナフォース・イン・アーキテクチャー」TOTO出版2011年7月28日

出典：「AVmonographs185(2016)」より著者一部赤点線に着色

出典：アレハンドロ・アラヴェナ「アレハンドロ・アラヴェナフォース・イン・アーキテクチャー」より著者一部赤点線に着色

※エレメンタルとは、アラヴェナやエンジニアのアンドレス・ヤコベッリやチリ・カトリック大学やチリ石油会社 COPECによる組織である。